



7月号

横浜市立中田小学校

学校だより

第440号



中田小

学校教育目標

さわやか笑顔中田っ子 思い合い ひびきあい
共に生きる力を育てます。

平成29年6月30日

中田小ホームページ

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nakada/>



「マジ」「ガチ」の価値

校長 蒲谷 猛

「高原列車は行く」

作詞 丘灯 至夫

作曲 古関 裕而

車の窓から ハンケチ振れば
牧場の乙女が 花束なげる
明るい青空 白樺林
山越え 谷越え はるばると
ララララ ララ ララララララ
高原列車は ラララララ
行くよ

みどりの谷間に 山百合揺れて
歌声ひびくよ 観光バスよ
君らの泊りも 温泉の宿か
山越え 谷越え はるばると
ララララ ララ ララララララ
高原列車は ラララララ
行くよ

峠を越えれば 夢見るような
五色の湖 飛び交(こ)う小鳥
汽笛も二人の しあわせうたう
山越え 谷越え はるばると
ララララ ララ ララララララ
高原列車は ラララララ
行くよ



私が担任をまだしていた当時の話です。6年生の担任は7回務めました、そのうちの5回目の時でした。(5年担任はなんと11回やっています。)「音声言語表現」が国語科の学習内容として新設され、「インタビュー」やら「討論会」などの学習単元が初めて教科書にも載せられるようになったころでしたので、夏休み明けの機会をとらえて、クラスでスピーチ大会をやることにしました。スピーチの冒頭はみんな同じ、「ぼく(わたし)にとって、今年の夏といえば～でした。なぜかと言うと～だからです。」から始めます。それぞれに夏の思い出を振り返りながら、自分の夏休みを象徴する出来事や言葉を探し、語っていきます。

「ぼくにとって、今年の夏休みといえば、減りゆくこづかいとの戦いでした。」そのときのスピーチのなかで今でも記憶に残っているのはこれ。姉の夏期講習のために旅行にも行かず、大きなイベントはなかった。やったことと言えば、毎日毎日校庭に来ては一人でゴールを使ってシュート練習をしたりドリブルをして校庭を駆け回ったりと、自分の大好きなサッカーの練習に打ち込み続けたことだったというのです。夏の炎天下、必死にボールを追っていれば当然のどが渴く、すると、学校のすぐ横の公園にある自動販売機で冷たく冷えた飲み物を買う、だからこづかいがみるみる減っていく、というわけです。コミカルにまとめられたスピーチでしたが、真っ黒に日焼けした顔で語るスピーチには、自分にとって一番大切なサッカーに一夏の時間をかけてやりとげた満足感や達成感があふれていました。

最近では、必ずしも「マジ」や「ガチ」が価値あるものとは受け止められず、疎まれたり避けられたりする風潮すら見られますが、やはり一つのことにとことん打ち込むことは大切なことです。「自信」はそこにかけた時間から生まれるものです。

あと数週間で やってくる夏休みは、「マジ勝負」「ガチ勝負」の好機です。今年の夏休みは38日。8月末には、自信のもてるものをしっかりと増やして、一回りたくましくなった子どもたちの笑顔に会えることを楽しみにしています。

最後に、サン＝テグジュベリ「星の王子さま」で、キツネが王子さまに言う言葉を。価値があるから時間をかけるのではなく、時間をかけるから自分にとって価値のあるものになる。

「きみが費やした時間の分だけ、きみにとって大事なんだ」